

## 博多老舗ものがたり

「ハダ工芸社」篇 (中編)

◎お聞きした方：代表取締役 波田 英次さん

数々の商業施設や公共施設、博物館やテレビのセットなどの設計・施工を手掛けるハダ工芸社。創業からもうすぐ六十年を迎える同社の二代目であり、現社長の波田英次氏に創業から今日までを聞いた。前社長が創業前、大きな借金を抱えたというドラマティックな展開が前回まで。ここから、怒涛の巻き返しを図る。

三十歳になるかならないかという年齢で、今の金額にする和一億円近い借金を抱えた父が選んだのは、会社を起業するという道。サラリーマンではとても返せそうもない額だという理由から起業を決意したようですが、業種はやはり、その時に極めていた看板屋の仕事でした。当時はお客さんが「〇〇さんの字で書いてくれ」と絵や字の職人を指名で選ぶような時代。看板屋は先生、なんて呼ばれていました。そこにきて、父は技術職を経験していないので、書くことができません。だから知恵を働かせました。単品の仕事を受注すると、人に頼んで書いてもらわないといけないので大変。なので、個人商店ではなく、メーカーなど複数店舗を持つ業種に営業先を絞り、同じ看板を複数作るという仕事を請け負ったんです。そして書ける人に一枚書いてもらい、型をとって複製していったそう。いわゆる、手作業の印刷です。このノウハウを得たことで、その後大きな仕事を請け負うことができるようになりました。「自分で書けない」というデメリットが、大きな仕事を受注するきっかけになったのです。

最初の転機は、自転車のヘッドランプの会社から仕事をいただいたこと。町の自転車屋に一気に同じ看板を出

しました。そしてその次は東芝さん。町に電器屋があふれていた時代ですから、何百という数の同じ看板を一手に引き受けさせていただきました。その次は鹿児島市のバス。当時、木の棒に丸い案内版が付いていただけのバス停を、鉄製にして広告スペースを付けられるものに変えましょうという提案をし、受け入れられました。この時はバス停を全て寄贈して、広告を入れる権利を代わりにもらったと聞いています。結局、広告を入れ続けることができなくて、その後止めてしまいました。ただ、この時鹿児島に大きく注力したことで鹿児島営業所ができ、今でもそちらは当社の主要拠点となっています。禍福はあざなえる縄のごとし、ですね。

そうして看板屋を続けるなかで、次の転機がやってきます。西日本新聞社との取引が始まり、博覧会の特需の度に売上げが大きく伸びたのです。当時は高度成長時代、若戸大橋完成や新幹線開通といった福岡の節目ごとに、新聞社は大博覧会を開催しました。一九六六年の福岡大博覧会、六九年の佐賀大博覧会、七五年の福岡博覧会、七六年の九州子供博覧会…これ以外にもまだまだあったと記憶しています。

また、東芝との取引は看板だけでなく店舗の内装やショールームの内装まで依頼されるようになりました。展示会などのイベントディスプレイは当時既に手掛けていたので、店舗内装も得意だと思われたようです。看板屋からイベントディスプレイ、内装業へと少しずつ業態が広がっていきました。(続く)



■株式会社 ハダ工芸社  
 福岡 中央区草香江2・2・20  
 ☎ 092・771・1181